

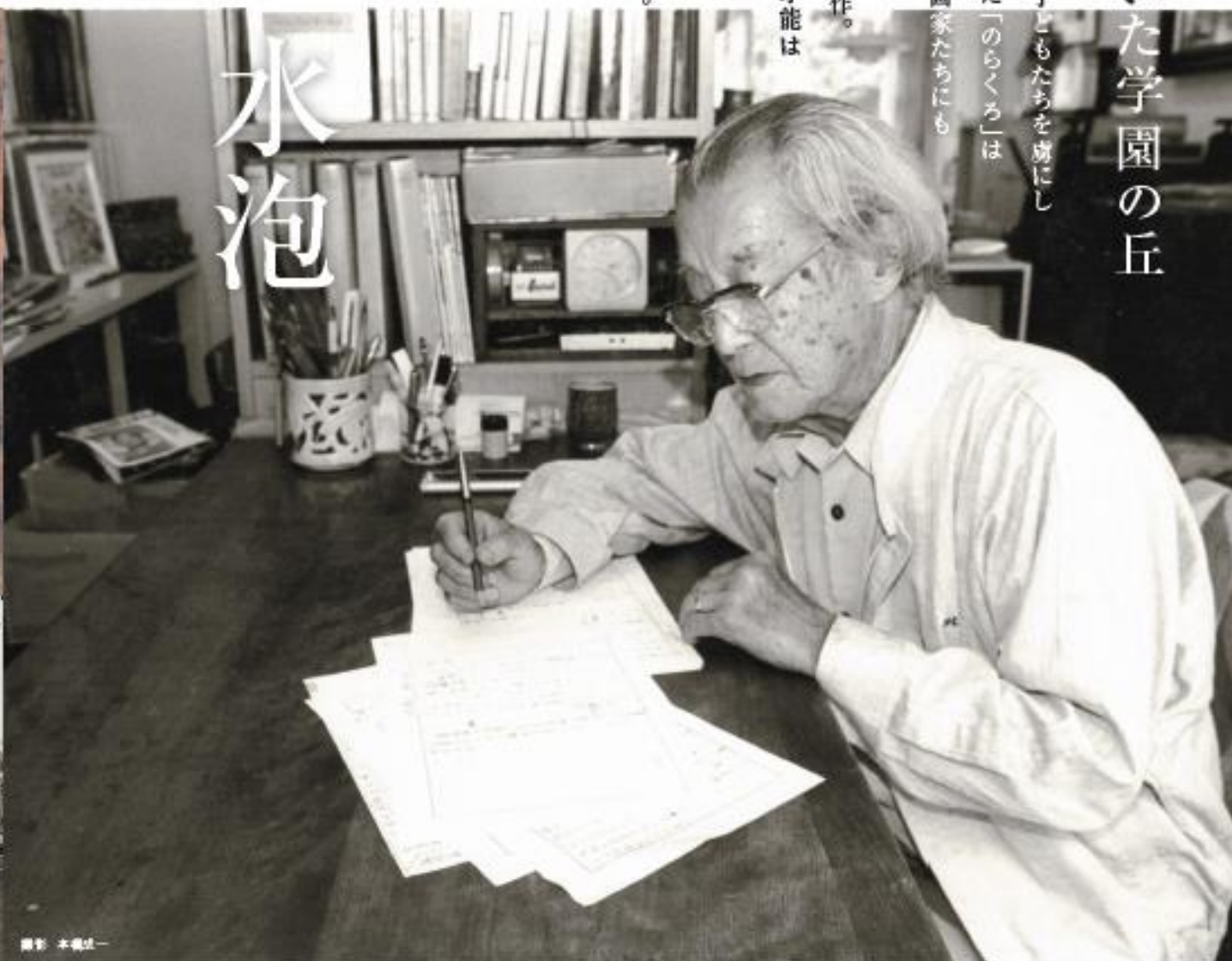
1. 水彩画「のらくろのいる風景―成瀬の橋下―」(阿田市立博物館蔵) 昭和20年頃から始めたエッセイ(随筆)や漫画の研究で集めた漫画の書庫は阿田市立博物館に寄贈された
2. 玉川学園の庭では花や野草、温室では沖齋を育てた 3. 多くの漫画家が弟子入りした。サザエさんの作者である長谷川町子もその一人(昭和30年頃、茨城で) 4. 5. 江東区の「田河水泡」のらくろ館」では沢山の資料や商品が展示されている 6. のらくろ武蔵野の漫画



特集2 田河水泡

昭和のはじめ、日本中の子どもたちを虜にした「のらくろ」は一大ブームを巻き起こした。「のらくろ」は後の日本を代表する漫画家たちにも大きな影響を与えた。日本漫画史上の最高傑作。作者である田河水泡の才能は漫画に留まることなく様々な分野で多くの業績を残している。

のらくろのいた学園の丘



田河水泡 1899(明治32)年2月10日東京市本所区林町(現・墨田区立川)生まれ。本名の「高見厚」を「たかみず・あわ」とまじり読みでペンネームにしようとしたが、「たがわすいほう」と多くの人が読むのでそのままにした。1928年『日玉のチビちゃん』で漫画家デビュー 1969年 漫画界初の紫綬褒章受章 1987年 戦国時代日小説受章 1989年 12月12日没、享年90歳
田河水泡・のらくろ館 東京都江東区豊下3丁目12-17 江東区豊下文化センター内 03-5600-8666 入館無料 開館時間：午前9時～午後9時 休館日：第1・3月曜日(祝日の場合は開館)及び年末年始 <https://www.kcf.or.jp/morishita/joetsu/norakuro/>

田河水泡・本名高見厚太郎。1歳で母親が亡くなり、孤独で恵まれない少年時代を過ごすも、趣味人の伯父や従兄弟の影響で絵描きを目指すようになった。小学校卒業後から働き、大正8年、20歳で入隊。除隊後、日本美術学校で本格的に絵を学ば。27歳の頃、生活のために持ち込んだ新作落語が認められ、落語作家となる。その時に描いた挿絵に感心した編集者から勧められて漫画を描き始め、昭和6年、「少年倶楽部」に「のらくろ」専卒」の連載が始まった。

のらくろは当初、兵役の義務と同じ2年という連載期間が決まっていた。ところが凄まじい人気に連載はどんどん延び、のらくろが連載する度に読者からのお祝いの手紙が束になって届いた。日本で初のキャラクター商品にもなった。玩具や文房具、雑貨や衣類……ありとあらゆるものがのらくろ柄になり、それらを飾った家の棚が、あまりの重みで傾き、土壁ごとこぼり落ちてしまったという。

のらくろは、身寄りのない真つ黒な犬がモデル。後に、田河水泡が「のらくろは俺の事を書いたものだ。」と義兄である小林秀雄に明かしたというが、楽天的でせっかかしい、でもどこかなく哀愁がある、それがのらくろだった。しかし、そのドジでのろまな描写が星軍を侮辱していると批判され、用紙節約に反していることを理由に昭和16年、執筆禁止令を受け、連載は中止となった。

戦争が終わり昭和22年に「少年漫画詩集」が出版されると、この頃から再び漫画の掲載が始まった。続編の執筆を切望していた彼は、第二次のらくろブームの追い風にのって、昭和56年に続編を完結させた。連載開始から実に50年、田河水泡は82歳になっていた。

玉川学園へ引越してきたのは昭和44年。静かで緑溢れる土地を求め辿り着いた学園の丘に、広い庭の家を建てた。書斎から続く念願の温室も作った。春には満開の山桜、夏には近くの湧き水に飛び交う無数の蛍。のどかな自然の中で長男家族と同じ屋根の下で暮らし、のらくろを描き上げながら大好きな園芸にも打ち込んだ一番幸せな時期だったかもしれない。丘の上の家には表札に描かれたのらくろが今でも客人を温かく出迎えている。